angelprincess

瑠璃色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｎｇｅｌｐｒｉｎｃｅｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ７０２９Ｚ

【作者名】
瑠璃色

【あらすじ】
もうすぐ、一端覧祭。
美琴のクラスメイトのクールビューティな沙羅、明るい未玖、ふざけたところがある流人、常時ハイテンションな玲＋美琴が学園都市に嵐を巻き起こす！？
一端覧祭で彼らは伝説を作ることになる！？

オリキャラがダメな方はバックをおすすめします。
作者の語彙はひっじょーに貧しいのでお気をつけください。

注意

この小説は美琴死ｅｎｄですので美琴ファンの方は読まない事をオススメします。
作者も美琴は好きですが、オリキャラから出来た作品ですのでどうしようもないです。
この作品は短期連載となっております。
これらのことを許せる方は次話へ・・・。
多分暗いお話になります。
後、作者は素人ゆえ、未消化で終わる部分もあると思われますがなにとぞよろしくお願いします。
要約すると残念クオリティってことです☆
ここまで聞いてなおｏｋと言って下さる方は次話へＧＯ！！
その他の方はブラウザバック推奨です。

進むか進まないかそれは汝が決めることーーー

クラス（前書き）

はじめまして！
かなり文が苦手なので分かりづらいと思いますがよろしくお願いします。

美琴視点です。

クラス

「御坂ー！」

ただいま、私、御坂美琴は高校一年生で楽しく？スクールライフを送っています。
一緒に学校に通っているインデックス、統括理事会理事長にならされた当麻に一方通行。魔術師と戦う時の仲間の元春にエリツァリ、アイテムの面々にｌｅｖｅｌ５の面々。
楽しくない筈が・・・ない・・・んだ。
確かに魔術師と戦うのも大変だけど、でも楽しい筈なんだ。

長点上機学園。

もうすぐ、一端覧祭がある。
最もこのイベントはいわいる文化祭で、学校説明会もあるので入学希望者が対象になる。
ここ、長点上機も見学者獲得に力をいれている。

１―Ａ

「クラスの出し物を決めます！」

委員長がハイテンションで言うと皆もイエーイ！とテンションをあげる。このクラスはエリートというより、バカやっている感じで楽しい。私もバカやってる一人なんだけどね！

「折角美少女と美少年がそろってるんだから、メイド＆執事カフェとかは？」

流人の提案にほとんどが賛成し、決定した。あーまた接客担当だなーと憂鬱に思っていると

「美琴、きっと接客担当でしょ？」

と言われてしまった。声をかけてきたのは日ノ坂　沙羅（ひのさかさら）。さっぱりした性格でクールビューティーと言われていてモテている。ｌｅｖｅｌ４の「風力使い（エアロシューター）」。

「みこちゃんは可愛いもんね」

この子は祭花　未玖（まつりか　みく）。明るくて少し子供っぽい。歌が上手く、歌姫と呼ばれている。ｌｅｖｅｌ４の「動物指揮（アニマルタクト）」。

二人も十分可愛いのに・・・。だって一日に二人のペースで告白されているんだよ？私達は１Ａの美人三姉妹と呼ばれているし。別に姉妹という訳ではないけど姉妹みたいでこのあだ名は三人とも意外に気にっている。美人はいらない気がするけど。

「三人とも接客担当だろ？」

そう言ってきたのは柊　流人（ひいらぎ　りゅうと）。カフェを提案した子だ。彼はイケメンなのだが自覚なしで性格はふざけたことろがあるけど、優しかったり、行動力があるいい子だ。ｌｅｖｅｌ２の「空間掌握（ルームアウト）」。

「そうだよ～。未玖も沙羅も接客だよ？」

「それを言うなら流人と美琴もじゃない？」

四人でふざけて言っていたのだが実際に十分後に私、沙羅、未玖、流人揃って接客担当になってしまった。衣装とか接客の練習とか大変なんだよなー。皆、同じことを思っていたようで苦笑した。

一週間後

「流っち！（流人のこと）笑顔！」

「ミクリン！（未玖のこと）料理を落とさないで！」

接客の先生の委員長の注意がどんどん飛ぶ。かれこれ一時間はこんな感じでさすがに・・・

「ずっと笑顔していろっていわれても・・・」

「少し休ませてよー委員長」

未玖は頬を膨らませて、流人はうんざりしているような顔をして抗議する。委員長はしょうがないなーと言い、十分の休憩をくれた。

委員長は本名、平野　玲（ひらの　れい）、性格はセリフだと真面目そうだが結構テンションが高く、お祭り事に目がない。人をあだ名で呼ぶ。ｌｅｖｅｌ４の「発火能力（パイロキネシス）」。

「みこちゃんは接客上手いなー」

「玲だって上手いじゃん。前、クレーム来たときとか凄かったよ？」

玲とは気が合う。玲も常盤台出身でどうしてもただ真面目なクラス

に馴染めなかったらしい。私も堅苦しいのとか、真面目なだけなのはつまらないと思う。今は凄く楽しいけどね。玲も楽しいみたい。

「みことといるかな？」

私を訪ねてきた人はインデックスだった。滅多に私のクラスに来ることなんてないのに。なんのようだろう？と不思議に思っていると クラスが騒がしくなる。これも銀の姫君と呼ばれているインデックスの力なんだろうなーとのんきに思っていると

「みこと！何ボーっとしてるんだよ？」

「あーなんでもない。で要件は？」

滅多に来ないインデックスの用なんて思いつかないし、なにか深刻なことでもあったのかな？と思っていたのだが

「みことぉ～とうまがとうまがね鈍くて気づいてくれないんだよ！」

たいしたことでは無かった。深刻に思うだけ無駄だったなーと呆れてしまった。インデックスをほっとく訳にもいかず話を聞いたのけど、結局勘違いし合っていただけだったので、

「素直に話しなよ？うち使っていいから」

とだけアドバイスし、戻った。まったく二人とも素直じゃないなー。青春おくってますなーと思いながらアイテムの面々に連絡する。

『インデックスと当麻が素直になんないからちょろっとてこ入れない？』

少し待っているとprrrrrprrrrr！携帯が鳴る。おそらくアイテムからの返信だろう。

『おっけぃだにゃー。でどうする？』

返信しようとしたが

「みこちゃん！早く戻ってきて！」

と未玖に呼ばれてしまいできなかったのだが・・・・。

そのあとが地獄だった。

ありとあらゆるメイド服を着せられ、礼儀作法をいらなそうなことまで叩き込まれた。流人と未玖は終わってすぐにカラオケに行こうと言い出し、帰れたのは七時だった。

完全下校時刻を大きくオーバーしたことについては突っ込まないでほしい・・・・。

能力の設定（前書き）

オリジナルの能力である、未玖の「動物指揮（アニマルタクト）」と流人の「空間掌握（ルームアウト）」の設定です。

能力の設定

「動物指揮（アニマルタクト）」

動物を従えることができる。
動物の声が聞こえ、ｌｅｖｅｌ次第で動物の巨大化、最小化が出来る。
その動物が懐いているかどうかも関係し、巨大化などは自分のペットとの方が成功率は高い。
未玖の場合、イメージ（自分だけの現実）をより鮮明にするため、巨大化させたりするときは掛け声のようなものを言う。
例「動物指揮（アニマルタクト）！ｄｙｎａｍｉｃｓ、フォルティッシモ！」
未玖は歌が得意な為、この言葉は音楽用語で、意味は未玖が強弱と言う意味のｄｙｎａｍｉｃｓを強弱でなく、大小と捉え、フォルティッシモは強くと言う意味だが大きくと捉えている。なので大小＝大きさを変えると言う意味で言っていて大きく＝大きくするという意味で言っている。

「空間掌握（ルームアウト）」

空間の把握、空間を創ることが出来る。
空間の把握はどこに誰がいて、その空間の大きさはこうということが分かる。
空間を創るというのは意味は違うが、ハルヒのつくりだすようなもので、自分の創る空間の大きさの範囲に（自分を中心として）いるとその空間に入る。本人は入ることも入らないことも出来るが今の

流人のｌｅｖｅｌでは不可能。創れる空間の大きさも制限がある。
空間を創るのを応用して足場を作ることが可能。

能力の設定（後書き）

分かりづらくてすみません

統括理事会（前書き）

今回は統括理事会、つまり上条さん達、ヒーローやｌｅｖｅｌ５のお話です。

訂正とお詫び

美琴達の学年ですが正しくは一年生でした。

誠に申し訳ありません。

統括理事会

統括理事会

現統括理事会は理事長、上条当麻、一方通行、理事の浜面仕上、麦野沈利、滝壺理后、土御門元春で構成されている。美琴は来期統括理事会採用が決定していて、今も手伝ったりしている。
このメンバーはよくも悪くも常識人が皆無だ。皆、どこか常識が欠落している。（一方通行達に言ったら怒られそうだが）
だからよく、行事の内容が変わる。今回も一端覧祭は入学希望者向けの行事だから外からの見学に来るのとまとめてしまおう！となった。要するに仕事がしたくない、めんどくさい、のだ。
よって結局理事長は仕事が増える訳で。
当日の来場者数を予測して、ＩＤを発行したり、ゲートの機械を多く導入したり、発表をしたり。とにかくやることが多い。（サボリ気味な部下の所為でもある）

「りじちょーこれサイン」

「へいへい」

「理事長～予算案こんな感じでいいかにゃー？」

「ン、ＯＫだ」

「当麻、一端覧祭のプランまとまったよ」

「悪いな、御坂」

「うだー休みてぇ」

「ちゃっちゃとまとめろォ、浜面ァ」

当麻が美琴に渡された一端覧祭のプランを見て

「御坂、このテレビで放送する超能力を使った出し物って長点上機と常盤台ってなってるけどどうやって決めたんだ？」

「抽選。これからその承諾貰いにいこうと思ってたんだけど」

美琴も苦笑している。抽選で五本指に入る学校が二つなんて偶然なのだろうか？

だが美琴は何事も平等に行うので嘘をついたとは思えなかったので当麻はま、いっかと承諾した。

「承諾してもらいに行くなら誰と行くか？」

さすがに高校生でどちらにも在籍していた美琴が交渉に行って大丈夫だろうか？

長点上機の理事長は事情を知っているのでまだしも常盤台といえばお堅いかんじだ。

なので当麻は聞いてみたが（ちなみに当麻は常盤台の理事長には会ったことがない）

「大丈夫よ」

けれど心配だったので結局

「お前が言い出しっぺだろォが。お前が行ってこい」
と一方通行に一刀両断され、美琴、当麻で行くことになった。

学舎の園

二人は待ち合わせの時間までかなり余裕があったのでぶらぶらしていると声をかけられた。

「御坂さ～ん！」

美琴の後輩で柵川中学の初春飾利と佐天涙子と常盤台中学の白井黒子だった。
案の定、美琴は黒子に抱きつかれそうになったが当麻らと鍛えた体で瞬間移動のような驚異的な動きでかわし、手のひらで軽く殴った。

「御坂さんと・・・どちら様ですか？」

「あぁ、統括理事会理事長、上条当麻だ」

「アハハ！それ業務用挨拶になってない？」

美琴はいつもの癖で統括理事会理事長と言ってしまった当麻を笑いつつもフォローするように

「統括理事会理事長補佐官、御坂美琴です」

と業務用の挨拶をする。しばらく三人はポカーンとしていた。

「御坂さん統括理事会に入ってるんですか？」

「ん、まあね。来期から正式に入るんだけど」

しばらく会ってないうちに随分と色々変わったんだなーと思い、少し寂しく思った三人だった。

常盤台中学

当麻と美琴は三人と別れ、常盤台中学に来ていた。
もちろん、こんな知名度のアップする話を断る訳なく、承諾してくれ、既に能力を使ったイベントを考えていた為そのまま実行委員の生徒と打ち合わせしていた。
常盤台はパフォーマンスショーをやることになっていて準備も終わっていたらしい。

「まず禁止事項は精神系の能力、人を使う能力ね。注意してほしいことは能力と能力で科学反応が起きないか。書類を見る限り大丈夫そうだけど最終確認に暇な時来るから」

それだけ言い帰った。長点上機はもう承諾してもらっており、インデックスを落とす方法について教えたりしながら戻ったのだが、

「みこっちゃぁん～」

なぜか皆、酔っていた。とりあえず個室まで運び片づけていたら、ワインとシャンパン、日本酒の空ビンがたくさんおちていた。もちろん、起きてから美琴と当麻が一時間説教した。もちろん皆、反論した為、問答無用で正座＆一日言うことを聞くと約束させられた・・・。

統括理事会の天気は晴れ時々怒鳴り声だった・・・。

常盤台中学（後書き）

酔っぱらいって怖い・・・。
麦野とか酔っぱらったらこんなことしちゃいそうだなーと思いまして。
次回からは真面目に一端覧祭本番スタートです！
感想お待ちしています！

一端覧祭一日目1（前書き）

前回のお話はキャラ崩壊していたので直しました・・・。
すみません！

一端覧祭一日目1

「流っち！カフェの材料は？」

「完璧。保存しておけるものは作って置いてある」

「ミクリン！出し物の方は？」

「後は演出の再調整だけだよ」

今日は一端覧祭当日。ここ長点上機も準備で騒がしかった。もちろん１－Ａもだ。というかここが一番騒がしい。玲の熱が周りに引火し、相当燃えている。沙羅、美琴には微笑ましくも少々うるさい感じがするが。

「あー玲、私用事があるから抜けるね。先生には言ってあるし、明日はちゃんとやるから。ごめんね」

玲が親指を立ててＯＫのサインをしたので美琴は常人では出せないようなスピードでどこかへとんでいった。

「まったく、明日は沢山働いてもらうからね？みこちゃん」

玲はよしっ！と気合を入れ直し、皆に指示を出していった。

統括理事会

「今日は一端覧祭だ！しっかりやれよ！まずスケジュールだが」

「八時に見学者の迎え、その後学園都市についての説明、九時から開催宣言を行います。
各理事はパトロールに行って貰います。風紀委員も一緒です。今回は１７７支部に協力してもらいますので時間や場所についてはそちらで確認してください。
理事長はテレビのインタビューが一時からありますので早めに昼食を済ませ、着替えてください。それまでは基本自由ですが器物破損、喧嘩は慎んでください。それと携帯を必ず持ち歩くようにしてください。」

美琴が完璧に今日の予定を話す。皆嫌そうな顔をして美琴を見る。
すると美琴はにこぉと笑いかけ、

「嫌だとか言う苦情は聞きませんよ？それとも殺されたいのですか？」

と言うので皆顔を真っ青にして首を横に振る。そのまま解散となった。見学者の迎えは美琴、当麻となった。容姿、性格を考えて決まったのだがやはりこの二人しか適任者が居なく、また美琴と当麻になった。

見学者の待つ場所

大きなバスが止まっている駐車場に並んでいる子供たち。選ばれたのは応募で当たった子、来年学園都市の学校に入学予定で入学する予定の学校に招待された子、成績優秀な為学校に推薦された子などだ。
そこへ大きなリムジンが現れる。出てきたのはスーツに身を包んだ

可憐な女性となぜか父親に似通った物を感じる男性。

「ようこそ、学園都市へ。統括理事会理事長、上条当麻だ。よろしくな」

「統括理事会理事長補佐官、御坂美琴です」

簡素な挨拶を済ませ、子供たちはバスへ乗せられる。次についた場所は大きなホール。だが子供たちは初めて見る科学の街に心を奪われていた。見たことない機械が街中を回ってる。外じゃ考えられないような近未来的な数々の建物。一端覧祭の準備で慌ただしく走る沢山の生徒達。

当麻と美琴は微笑んでしょうがないとしばらくその光景を眺めていた。

「そろそろ中に入りましょうね」

美琴の呼び掛けで先生らしき人物が皆に呼びかける。ここは学生の街。学校も無数にあるので先生にも勉強になる場所なのだ。よって、先生も研修という形でいるのだ。

ホールの中へ全員入ったことを確認すると美琴はマイクを持ち、学園都市についての説明を始めた。

「ここは科学の街。警備ロボットが徘徊していますが、触らないようにしてください。怖い人に話しかけられたら私かこのお兄さんを呼んでください。後、このＩＤはこの街でのあなたたちの身分証明書です。絶対になくさないでください」

そしてＩＤをくばる。

「質問はありますか？」

「はーい！」

元気よく手を上げた男の子を指す。

「お姉さんはどのぐらい強いの？」

「んー、このホールを壊せるぐらい、かな？」

さすがに一人で軍隊と戦えるとは言えなかったがそれでも子供たちはすごいと思ったらしい。質問を終え、教職員のみ別室に呼ぶ。

「この街には超能力があります。それ故に格差のような物が出来てしまっています。襲われたり、銀行強盗が起きたりしています。昔と比べて減りましたが・・・。この街の平和を守っている風紀委員や警備員がいますので何かあったらすぐに連絡してください」

番号を教え、その他の注意することを話し、観光に出発することにした。

一端覧祭一日目1（後書き）

一日目が思ったより長くなってしまったので分けました。
どうしよう・・・見学者の中にコナン（名探偵コナン）達を入れたい・・・。
もしかしたらifとしてつくるかもしれません。
見学者にコナン達入ってるバージョン（笑）

一端覧祭一日目2

バスから見える風景にキャーキャー言っている子供たちを見て

「なんか懐かしいなー。上条さんも昔はこんなだったけな」

「言ってる事が爺さんくさいですよ？」

少なくともまだ十代の人が言う台詞ではないだろう。当麻はそうかぁ？と言っただけだった。

「て言うか敬語じゃなくていいぞ」

「そう？じゃあいつもどうり喋るよ」

二人は見慣れた景色に反応することもなく、パトロール大丈夫だろうか？とかインデックスのことを話していた。

「早くインデックスに告白したら？見てるこっちがじれったいのよ」

「上条さんはどーせ不甲斐無い男ですよーだ」

いじける当麻をよそに美琴は目の前の子供たちを見つめる。美琴は私とは正反対ね。私はいつから無邪気じゃなくなったんだっけ？と物思いに耽る。

とんとん

「おーい御坂？開催宣言の会場についたぞ？」

「ごめん、ちょっと考え事してて」

上条と美琴が向かったのは放送室のような場所。すでに一方通行が待っていた。

「遅かったな三下ァ」

「わりいわりい。じゃ始めますか」

美琴がスイッチを押し、レバーを上げる。

『ただいまより一端覧祭、開催宣言を行います。まずは上条理事長からのご挨拶です。』

『統括理事会理事長、上条当麻と統括理事会理事長、鈴科真だ。皆さん、今日は一端覧祭です。守るべきことは守って、大いに盛り上がれ！けれどくれぐれもやりすぎないようにな！』

美琴が頭を抱えるが、一端覧祭は学生の行事だからこそ上条も羽目を外せる。だが美琴の頭痛の種なのには変わりないらしい。これには一方通行も同情的な視線を送っている。

『次に鈴科理事長の開催宣言です』

『これより、一端覧祭を開催することを宣言する』

遠くからオー！と言う声やがんばるぞ！と言う声が聞こえてくる。

三人は微笑み、こちらもコツンと拳をぶつけた。

風紀委員第１７７支部

「統括理事会理事の浜面仕上だ。少しの間だがよろしくな」

「同じく統括理事会理事の土御門元春だぜい。よろしくな」

「麦野沈利だにゃー」

「たきつぼりこう。よろしく」

統括理事会の面々の自己紹介が終わると

「固法美偉よ。よろしくね」

「白井黒子ですの。よろしくですの」

「初春飾利です。よろしくお願いします！」

理事会のメンバーは特に関心がないようで浜面だけが必死に覚えようとしていた。そんな浜面に統括理事会の面々はこれだから馬鹿面は・・・とかドンマイ的な視線を送っていたりしている。そんな中元春が

「白井・・・あぁ！ミサやんとこの変態的後輩だにゃー！」

「あぁ、御坂が近づかない方がいいわよって言ってたな」

しばらく皆黙ってしまう。そんな沈黙を破ったのは電話だった。白井がスピーカーホンにして出る。

「もしもし、風紀委員第１７７支部ですけど「ちょっと土御門・・・」お姉様！どうかされたのですか？」

そんな白井の呼びかけが聞こえなかったかのように怒鳴り声が響く。

「土御門・・人の服を！全部メイド服にすんなぁ！忙しいのよ！あの馬鹿どもが色々やらかすし、だって二人して自動販売機壊すわ、睨んできた不良を殺しかけるわ、勝手にどっか行くわ・・・「ご愁傷様、ミサやん」よし土御門、舞夏に言いつけとくわ」

そう美琴がいうとサァ・・・と土御門の顔が真っ青になっていく。それにしても器物破損に殺人未遂、行方不明と白井、初春、固法は美琴ってなにもの？と思いかねないような事だ。まぁやっているのは当麻と一方通行だが。

「ミサやん何でもするからそれだけは勘弁！！「わかったわよ。こんど当麻達と残業ね。もちろん残業手当もなしよ？」はい・・「黒子たち、うちの馬鹿どもの事よろしくね」

プツッ・・・電話は切られてしまった。

白井たちはこれからどうなるのか正直怖かった。

数時間後

結局、酷かった。誰かさんはずっと電話でメイド談義をしてるわ、誰かさんは売られたけんかは買いまくって殺しかけていた。後で皆、五時間程美琴にこってり絞られ、皆で仲良くサービス残業だったとか。美琴は全員で謝りに行き、その上、一個数千円のお菓子まで謝罪として渡したとか。（もちろんお支払いは一方通行のクレジット

カードで）

一端覧祭一日目2（後書き）

どうでしたか・・・？地の文が難しい・・・。
感想お待ちしております。

一端覧祭二日目１（前書き）

ついに一端覧祭らしく・・・！

一端覧祭は何日間か分からないので二日間にさせていただきました。

ちなみに１１月に開催されるんですよ～（確か）

一端覧祭二日目1

長点上機学園

1ーA

美琴はロッカーの前で呆然としていた。なぜなら、メイド服が凄まじかったからだ。
超ミニの丈に五段フリル。大きなリボン。
怒りを通り越してもはや呆れていた。昨日さぼったからか？などと考えていると未玖がやってくる。未玖も同じ格好だった。
今日は統括理事会のメンバーもやることがなく、来ると言っていたので最悪だ。

「みこちゃんそんなに沈まないでよ。早く行こ？」

未玖に手を引っ張られる形で教室にたどり着く。クラスメイトがおーと感嘆の声を漏らしているのすら気付けないほど美琴の気分は落ちていた。未玖、玲はニコニコしていて、沙羅、流人は苦笑している。
時間は待ってくれず、すぐに開店時間を迎えた。

「いらっしゃいませ。何名様ですか？・・・・・ぁ」

「えーと五人？」

「馬鹿か。六人だろォが」

言うまでもなく、最も会いたくない人物ワースト１０に入る人物達

だった。

「こちらへ」

今は学園祭、今は学園祭・・・美琴はそう念じ、精巧に作られた作り笑顔でニコと笑いながら席へと案内する。

「ご注文は？」

「アイスコーヒー」

「鮭弁当」

「ないです」

「メイド特製パフェ」

と好き好きに注文していく。どんどん作り笑顔が黒くなっていく美琴に上条と浜面は同情的な視線を送り労いの言葉を掛ける。小さくありがととだけ言い、別のテーブルに移動していった。まぁ特に何も無く、終わったからよかったとだけ言っておこう。

「いらっしゃいませ！」

「御坂さん！来ちゃいました！」

初春、佐天、白井が訪れた。ちょうどお客さんもいなかったので少し話していると

「美琴、友達？」

沙羅に声を掛けられる。おそらく、美琴は統括理事会で忙しく、あまり友達と遊ばないのをしっているからだろう。未玖、沙羅、流人、玲は美琴が統括理事会に入っていることをしっているのでなおさらだ。

「うん。後輩よ」

「そうなの。珍しく美琴が私達以外の人と話してるから少し驚いた」

「でもみこちゃんだって友達ぐらい居るでしょ？あ、始めまして～祭花未玖だよ。よろしくね！」

未玖までやってくる。初春たちはしばらく驚いていたがよろしくと返した。するとお客がいなくて暇だからか流人もでやってくる。

「なにはなしてんの？こんにちは。柊流人だ」

「私も自己紹介しなきゃね。日ノ坂沙羅よ」

学校のことや最近の出来事、最近出来た友達のことを話しているとお昼時になり始めたので、別れた。１ーAのカフェは人気で初春達と話してた時以外は休む暇もなく、忙しく働いた。

そしてもう一つのイベント、そう、テレビが取材に来る出し物だ。常盤台は午前にやり、長点上機は午後にやることになっていたのだ。やるのは・・・演劇。
いつも見ているものがけれども超能力で凄くさせられるものならこのへんが妥当だろうとの意見で決まった。いつも見ている物にしたのは凄さを分かりやすくするためだ。やるのは『シンデレラ』。

配役は←

シンデレラ・・・御坂美琴

王子様・・・柊流人

継母・・・日ノ坂沙羅

意地悪なお姉さん・・・祭花未玖、神裂桃歌（インデックスの偽名。神裂、当麻の名前から）

魔法使い・・・絹旗最愛

となった。もちろん指導は玲。

さてどうなる・・・・？

一端覧祭二日目2

「シンデレラ、お皿を洗いなさい」

「シンデレラ、洗濯をするんだよ」

シンデレラは継母とお姉さんにいつもいじめられていました。かわいそうなシンデレラは舞踏会にも連れていってもらえませんでした。

しかし魔法使いが魔法をかけてくれました。

シンデレラの衣装か一瞬で変わる。これは座標移動だ（結標協力）。

そして馬車は空を飛ぶ。これはオリジナルアレンジで念動能力を使っている。

パーティーも空間移動で一気に飾り上げ、シャンデリアは念動能力で宙に浮かせる。歌姫と呼ばれる未玖はピアノも上手く、ワルツを弾く。

王子がシンデレラの手を取る。二人は踊り、楽しい時を過ごしたが十二時の鐘がなる。シンデレラはガラスの靴を残して帰ってしまう。

そして王子様がガラスの靴を持ってやってくる。シンデレラが履くとあらぴったり！

座標移動でドレス姿に変わり、王子様の告白を受け終わる筈だったのだが告白を受けてすぐに美琴がつまづいてしまう。

とっさに流人が美琴の手を掴み、引き寄せキスする。

ちゅっ

小さく音を立ててキスする。二人はその後何も無かったかのように振る舞った。

打ち上げ

カンカンッ！
グラスとグラスがぶつかる音があちこちで鳴る。
沙羅、未玖、玲も乾杯する。

「みこちゃんと流っちどこ行ったのかな？」

「さぁ？」

沙羅も玲も妙にぎくしゃくしていた美琴と流人を思いだし目を瞑った。
”大丈夫だといいんだけど・・・”

打ち上げ会場の隅
からん　美琴がグラスを傾ける。先ほどのキスを思いだし、顔が火照る。ヒヤッ　急に頬に冷たい物を感じる。

「ひゃぁっ」

「よっ！こんな隅っこにいないであっち行ったら？沙羅達もいるぞ」
美琴はあ、うんと曖昧に頷くだけで一向に動こうとしない。しばらく沈黙が続く。

「悪かったな。さっきは」

流人が謝っても美琴はずっと黙っている。だが掠れ掠れに言葉を紡

いでゆく。

「流人は・・私を助けてくれたのに・・自分のことしか・・考えてない・・そんな自分が・・すごく嫌」

思わず流人は抱きしめる。ひくっと小さな嗚咽が聞こえる。美琴は思い切り泣いた。

「美琴、沙羅にも俺にも甘えていいんだよ。誰も迷惑なんて思わないから」

流人が悲しそうに笑った。

「ありがと。さ、沙羅のとこ行こう！」

すっきりした顔で戻ってきた美琴をみて沙羅は安心した。

打ち上げ（後書き）

ついに一端覧祭編完結しました。
最後がめちゃめちゃかなー？
次は魔術が出ます！
神話を猛勉強中でございます！

ａ　ｈａｐｐｙ　ｎｅｗ　ｙｅａｒ！
今年もよろしくお願いします！

感想お待ちしています！

むー神話どうしよー？
レムスライン以外の神話でこれいいよ！と言うのがあったら教えて下さい。

レムス

美琴は沙羅、未玖、流人と久しぶりにファミレスに来ていた。しかし、一方通行から連絡が来る。魔術師が侵入した、と。すぐに統括理事会全員で向かう。
そこには美琴と年があまり変わらない少女が待ち構えていた。

「あなたが神ね？」

少女は美琴を指してそう告げる。

「なんのこと？」

「とぼけても無駄よ。この壁を越えんとする全ての者に災いを！」

足元のラインがキランと浮かび上がる。咄嗟に当麻が右手を出す。ラインは元に戻る。一方通行が攻撃する。少女は軽々とよけるがその先には当麻が待ち構えていた。気づくのが遅れた為、少女は思い切り殴られる。このままでは分が悪いと感じたのかいちもくさんに逃げ出す。

「御坂、お前は何者なんだァ？」

美琴は何も言わない。

「言え」

一方通行が強い口調で言う。

「・・・分かった。私の本当の名前はアルトリア。美琴は親友を庇って死んだ。最後に上条当麻を支えてと言い残して」

皆、思いもしなかった事実に呆然とする。

「あれは只の願望だったのかもしれないし、本当にしてほしかったことかは分からない。けど親友はそれを叶えようとした。親友に偽りの人生を歩んでほしくなかったから私が彼女に成りすました」

ビリッ！化けの皮を剥がす。

するとプラチナ色の髪と金の瞳が露になる。長く伸びた髪に大きな眼。まちがいなく美人だ。アルトリアはその大きな金の瞳を閉じる。決意したかのようにまた眼をあける。

「私は神。天使を簡単に倒せるような化け物よ」

レムス（後書き）

戦闘シーンは苦手だ・・・・。
最後まで残念クオリティですみません・・・・。

箱庭の少女

私の力は恐れられていた。だから私は楽園という名の地獄に閉じこめられていた。
誰も目を合わせてくれない。むしろ背けているように感じる。
足枷に手枷を着けられ、生きることにすら絶望していた。
でもそんな私をローズが救ってくれた。対等に扱ってくれていつもニコニコ笑ってくれていて。
けれど外出許可がでた日にローズは殺されかけ、私は御坂美琴として生きはじめた。
記憶喪失と偽り、美琴のことを聞いて必死に演じていた。
壊すことしか出来ない破壊神の私は守る強さとか優しさとか愛情とかなんて分からない。
でもローズとの約束と私に出来る唯一のことだから。
止める訳にはいかなかった・・・！
そんなのは偽善で罪滅ぼししたいだけなのだと分かっている。
いや、分かってないのかもしれない。だからこんな無意味なことを続けているのだろう。
けれど美琴の大切な人を壊したくなかったんだーーー

きっと明日には楽園に連れていかれるだろう。
箱庭から出られない、生きることに絶望している少女に戻るだろう。
ローズは今、学校の先生だ。きっと関わることすら無い。
それでいいんだ。ごめん、美琴、ローズ。約束守れなくて。

さようなら、皆。

箱庭の少女（後書き）

意味分かんないですよねー。
とりあえず、最後の方だけ覚えておいてください。

さよなら（前書き）

なんかどんどん鬱展開に・・・。
こんな駄文を見てくれていてありがとうございます。
頑張ってバットエンドは回避しますので！

さよなら

広い空港のロビーにヒールの音が響く。
イギリス行きの飛行機はほぼ空席のようだ。
アルトリアはもう一度学園都市を目に焼き付けて搭乗口に向かった。
ピリリリ！携帯が鳴る。ディスプレイにはステイルの文字。はぁと溜息をつきながら電話に出る。

「もしもし？・・・今イギリスに帰るところよ。・・・あ、一つ頼まれてくれない？・・・お願い。ん、じゃあね」

そのまま急ぎ足で再び搭乗口に向かった。

統括理事会
皆、黙っている。事実に打ちひしがれている。重々しい空気の中、陽気な音楽が流れる。土御門の携帯だったようで皆に断り出る。しばらく話し込んでいたがすぐに切ってしまう。

「アルトリアはイギリスに帰った。それと俺たちに届けものがあるらしい」

そういうのを見計らった様に荷物が運ばれてきた。手紙がつけられていたので読んでみる。

[皆へ。
騙しててごめん。
棺の中身は美琴よ、今起こっている戦争で死んだことにしておいて。

楽しい時をくれてありがとう。私はまた捕らわれの身となるけど、
いつか会え　るといいね。
さようなら
アルト
リア」

さよなら（後書き）

本当に文才がない・・・！
いきなり展開多いっ！
こんな私でいいのならリクエストとかお答しますよ、お嬢様。
短期の筈だけど無事終わるかな？

すべてを鎮める者（前書き）

コナンとのクロスオーバーが浮かんでくる・・・！
反対がなかったらやっちゃおーかな？
アルトリアが学園都市に行くまでとついてからみたいな。
再会する時のお話なのでまだまだですけどね！

すべてを鎮める者

アルトリアは神裂と合流し、戦場に行く。
酷い有り様だった。アルトリアは目を閉じる。次に目を明けた瞬間、大地を包み込めそうな大きな翼が現れる。
その翼が戦場を包み込んだ。
フワッ　翼が離れると皆気絶した。
解析不能の絶対的力。アルトリアはその力を持った故に閉じこめられていた。

「火織、なんでこんな力あるのかな？」

「分かりません。けど自分の力なんですから、自分の思った通りに使えばいいと思いますよ」

アルトリアはニコと笑い、そうだねと返した。神裂は初めてアルトリアの年相応な部分を見た気がした。

それから戦争終焉後アルトリアは必要悪の教会に入り、大活躍した。
異国の彼らも頑張っているようで時折噂を耳にした。
アルトリアは手紙のやりとりだけはしているらしい。
会えるといいけどと彼女は言うけどそんな暇はないようだ。

「いってきます！！」

今日も彼女の声が澄んだ空に響きわたった。

「そういえば今回は日本でしたっけ」

「あぁ、妙なことが起きないといいが」

奇しくも見た目年齢が実年齢よりかなり上の二人の予感は当たってしまうのだった。

すべてを鎮める者（後書き）

最後の二人はステイルと神裂です☆
未消化すぎますが次に消化しますので。
コナンとのクロス反対の方いたらメッセージください。
まだ決まってないので！

再会（前書き）

戦争の数年後です。
クロスは書きにくくなるのでなしで。
少しはお話作ってたのでいつか番外編としてあげようかな？

再会

日本
アルトリアは今、東京にいた。
今回はテロに魔術が使われるかもしれないと言うことでまだやることが無く、長期滞在の為、街を歩いていたが、買いたい物も特に無く結局カフェでノートＰＣをいじりながらお茶していた。
アルトリアは視線をうっとおしく思いながらものんびりしている。
アルトリアに向けられている視線はアルトリアの容姿が目を引くから思わず見とれてしまったと言う類のもので妬みや恨みの視線ではない。
暇を持て余していると携帯がなる。
ステイルからのメールで、内容は学園都市に魔術師が侵入したから応援に行けとのことだった。
新手の嫌がらせか？などと思いつつもササッと会計を済まし、タクシーに乗り込む。

「お客さん、どちらまで？」「学園都市」

かしこまりましたと言う運転手の声と共に音も立てずにタクシーは発進した。

再会（後書き）

短くてすみません。
最近、さらに自分の駄文さに気づき、自己嫌悪に陥っています。
さてもう学校です。
何分学生と言う身分の為、勉強してる訳じゃないですが時間があったりなかったり。
明日からは短い上に不定期（今までだってさして定期的ではなかったけど！！）になってしまうことをお許しください。

あでゅー☆

もう一度

久しぶりの学園都市で私を待っていたのは沙羅、流人、未玖だった。

「久しぶり、アルトリア」

私は思わず未玖に抱きついた。だって私を只のアルトリアとして見てくれる人はこの三人しかいないから。そういえばあの時もこんな感じだった・・・。

数ヶ月前

この時私は偽り続けるのに疲れていた。というのも御坂美琴は私と正反対の性格だったからだ。閉じ込められていた私には自然体というのが分からなかったし、明るくなんて無理な話だ。

私は耐えられず、立ち入り禁止の屋上でいつも項垂れていた。その日もそうだった。

キィ・・立ち入り禁止で鍵が掛かっている屋上に錆び付いたドアの開く音がした。誰も入れない筈なのに・・・。いや大人かもしれない。見つかる前に帰ろう。私はその辺に放り込んでおいたバッグを取り、入り口に向かう。

「あれ？貴方もここ使ってるの？」

突如掛けられた声はまだ幼さが残る声で驚く。振り返ると三人の少年と少女。だが返事をせずにそのまま帰ろうとした。

「涙でてるわよ」

私は知らず知らずの内に片目から涙を流していた。なんだ、泣けるんじゃん。そう思った。だって涙の流し方なんて知らなかったし、泣くことなんてない。あの地獄より遥かにいい場所なんだから。何も言わない私にきょとんとする三人。

「貴方ってたしか同じクラスの御坂さん？」

私はうんともいいえとも言わなかった。だって答えたら自分で自分の傷を抉ることになるから。泣いたのはコレが原因の筈でしょう？うんと言ったらアルトリアが消えそうで。いいえと言ったら美琴じゃなくなるから。

「困っているなら言いたいことがあるなら言って」

「私はっ・・御坂美琴なんかじゃないっ・・・けどっ・・」

不意に漏らしてしまった弱音。そして私の物語をこの時知ったのは、未玖達、だった。

現在

「ほら、行ってきなよアルトリア。臆することなんてないよ。自分は自分だから」

私は行きたくない、戦場へ向かった。

――会えないよ。もう二度と。だからさようなら――

会ったら私が壊れそうだから。ごめんね、我が儘な私を許して。

私はばれないように伊達メガネを掛けて、パーカーの中に髪を隠し、帽子を被った。

逃げてるなんて分かってる。けどそうせずにはいられなかった・・・。

もう一度（後書き）

美琴ちゃんの死がさっぱりな件に関して
作者は美琴ちゃんｌｏｖｅなんだよ！！
死ネタとかやりたくない・・・。
じゃあやるなって感じですよねー。
アルトリアから世界観を作ったのがまずかったかな？

また会える日まで（前書き）

駄文度がアップしてる・・・。
もう最終回ですのでお付き合いくださいませ。

また会える日まで

私は戦場にたどり着くと上条達の姿を確認した。
皆に当たらないよう気を付けなきゃ。
フワッ　翼が現れる。黒く、鴉のような翼が。

「ｈｅｌｌａｎｇｅｌ」

周りの敵は翼に包まれ、次の瞬間血を出して倒れた。大して酷い出血量でもないのでそのまま放っておき、帰ろうとする。

「アルトリア？」

誰かがそう呟いた。私の力を知ってる筈ないのに。でも・・・私は皆の前に出て帽子を脱ぎ、隠していた髪をさらけ出した。

「バレちゃった？怪我してないみたいでよかったよ。じゃあね」

一方通行で終わらせようとする。あっちの思いなんて知りたくない。聞いたら帰れなくなる。
火織とステイルが待ってるのに。あの二人は私をアルトリアとして見てくれる。道具とか恐怖対象ではなく。だからこそ帰りたい。けれど言葉は紡がれた。

「ありがとな！また会えたらいいな！」

そんな優しい言葉をかけないでよ。帰りづらい。でもそれが彼のいいとこなのかもね。
そうでしょう？御坂美琴。

また会えるかどうかはわからないけど一生忘れないよ。

ありがとう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7029z/

---

angelprincess

2012年1月15日00時50分発行